

# 『落合新聞』の研究（1）

A Study of the “Ochiai Shinbun” (1)

福井 延幸

(Nobuyuki FUKUI)

## はじめに

『落合新聞』は下落合在住であった竹田助雄によって昭和37（1962）年から昭和42（1967）年にかけて50号にわたり発行されていた落合地域とその周辺の記事を掲載したローカル新聞である。新聞の体裁はタブロイド版2ページ、（22、27～29、31～34、37～39号は4ページ）編集兼発行人として竹田助雄（第9号からは発行「落合新聞社」、編集竹田助雄）の名が掲載されている。印刷は新宿区西大久保の自由新聞印刷株式会社がおこなっていた。

まちに関することがらを取材し記事として掲載し、まちについて考えて各種の提案を行い、結果として高度経済成長期の落合地域の変容を記録することとなった『落合新聞』の活動は、「町の利益」について考え、それを新聞の発行で守っていこうとする姿勢を持つものであった。

本稿では、高度経済成長期のただなかにあって落合地域の変容を詳細に記録したローカル新聞である『落合新聞』の内容について検討していく。1960年代の落合地域に『落合新聞』はいかに向き合ったのかということ考察するのが本稿の課題とするところである。『落合新聞』が地域をどう捉えたかを地元学的視点を取り入れながら高度成長期の落合地域について検討をくわえ、『落合新聞』が落合地域に与えた影響について再評価していこうとするものである。

## I. 『落合新聞』発刊当時の状況

### 1. 1960年代のローカル新聞の動向について

1960年代の地域メディアについては、「六〇年代後半以降、国の開発政策が具体的に地域に実現する過程で、過密・過疎問題や公害問題、さまざまな地域格差問題などが顕在化してくるにつれ、当該地域メディアの情報内容が一変し、市民や住民に共感を与えたり注目されたりするようになる。とくに、地方の県紙や地域小新聞、ローカル局の放送などが、市民や住民の地域問題に対する運動の展開に呼応する姿勢が顕著に見られた。」<sup>1)</sup>と評価されている。中でも同時期のローカル新聞については、「地域のメディアとして活字が普及する。まず、「地域小新聞」とか「ローカル新聞」とよばれる週刊、月刊の新聞が、全国津々浦々のまちに広がった。その特徴は、戦前に地方新聞に働き、戦時体制のなかで、政府により休廃刊・合併で職を失っていたジャーナリストが起業するという点にあった。したがって、新聞の体裁、記事、論調などは一定のレベルにあったが、どちらかというと保守的で、やや強面の古い体質をもっていた。地域のニュース、人事往来、論説もかたいものであったが、地方行政へもきびしい目を向

けていた。しかし全体としては、高齢でそれを引き継ぐ世代の育成に成功せず、次第に先細りになっていった。もっとも戦後の地域開発、企業誘致、環境破壊という現実直面して、それへの批判を展開した小新聞も存在した。」<sup>2)</sup> というように分析されている。

このように1960年代に広がった地域メディアとしてのローカル新聞であるが、その呼称は地方紙、ローカル新聞、地域小新聞など多様であり一定していない。『落合新聞』については、竹田はローカル新聞と称していた<sup>3)</sup>。ではローカル新聞とはどのような新聞をさすのか。田村紀雄・鈴木裕久は、ローカル新聞についての全国調査を行った際にその選定基準として、

- ①いわゆる県紙がカバーしているよりも小さな地域をカバーしたものであること。
- ②他の企業の単なる副次的活動・臨時的活動として発行されている以上の規模を有すること。
- ③一般紙として、その地域内の不特定多数のひとびとを対象とし、有料で定期的に発行されているものであること。

という3点を挙げている<sup>4)</sup>。

『落合新聞』は①と②については該当するが、③の「有料で定期的」という部分は当初はあてはまらなかった。このことがすなわち『落合新聞』がローカル新聞に該当しないということにはならない。しかし、『落合新聞』が積極的に購読料を徴収しなかったということは後述するが、この『落合新聞』の姿勢を端的に示すものであるといえよう。

## 2. 1960年代の落合地域

近世の落合地域は、江戸近郊農村、都市の周縁としての特質をもっていた。この特質は明治以降にも引き継がれていくが、大正12（1923）年の関東大震災は、落合地区のこの特質を失わせることになった。落合地区の農業は押し寄せる人口の増加と近代化の余波を受け衰退していくのである。さらに昭和2（1927）年の西武鉄道（村山線）の開通も影響し、落合は住宅街として開発が進んでいく。大正末期より開かれた目白文化村をはじめ、昭和初期には葛ヶ谷（現西落合）において耕地整理が行われるなど郊外住宅地開発が先駆的に進み、昭和8（1933）年に妙正寺川一帯は風致地区に指定されるなど、みどり豊かな近郊市街地をめざした試みがいくつも展開された<sup>5)</sup>。

第二次世界大戦後の復興期を経て1960年代、いわゆる高度経済成長の時代にあって東京は大きく変貌していった。それは落合地域も例に漏れるものではなかった。1960年代の落合地域について、昭和31（1956）年に下落合（現・中落合）に生まれ、育ったコラムニストの泉麻人は以下のように語っている。

「僕の子供時代、昭和の三十年代の頃までは、東京の区内に住みながらも、「街」という言葉があてはまるような“ホンモノの東京”というか、「都」<sup>みやこ</sup>との距離があった—という印象がある。つまり、自分の下落合の家から見て、池袋や新宿、東京駅や銀座といった都心は、今よりもずっと遠く離れた“異界の地”という意識があった。だいたい、近所の商店街のなかに、ビ

ルという建造物がほとんど見あたらなかった。デパートのような高いビル群がずらりと建ち並んでいる場所が、絵本に出てくる「ホンモノの東京」で、うちの近所あたりは、バリヤーの外側のただの田舎町—といった認識である。」<sup>6)</sup>と高度成長期の変容のさなかであるが、近代の近郊区街地としての性格はまだ失われていなかったようである。

## Ⅱ. 『落合新聞』の発行

### 1. 『落合新聞』発行の目的

日本のローカル新聞研究の第一人者である田村紀雄は、ローカル新聞創業の4つの動機について「いま社主や発行人、編集長となっている人たちは、どのような動機でローカル新聞を興し、あるいはこの世界に飛び込んだのであろうか。大まかにいって、地域民主主義への寄与、クオリティ・ペーパー製作の実験、政論紙時代へのノスタルジア、センセーショナル・ジャーナリズムの四つの動機があると考えられる。」<sup>7)</sup>という。また、岳南市民新聞の落合巳代治は「ミニコミ—地域小新聞—の存在意義は何か」の問いに対して「それはマスコミにできないことをやることだ」<sup>8)</sup>と答えている。地域の中でマスコミにできない地域の発展への貢献をしていくということが、ローカル新聞の存在意義といえよう。では、『落合新聞』がめざしたものは何か。

『落合新聞』発行の当時すでに『文芸首都』の同人であった竹田は昭和37年5月3日発行の創刊号1面の「発刊に際して」で以下のように述べている。新聞発行の目的について、「しいて理由づけるなら、直接の動機は単純なものでたまたま防犯の集りに出席したときに拝聴したタメになる話を、町の人達に知らせることができたなら便利なこともあるだろうと思ったから」であり、「元来好きなことだし、好きなんだから仕方がないというより外に、深い意味も野心もなさそうであった。」「この土地に永く住んで、もはや退くことも去ることもできなければ、この町に愛着し郷愁を覚えるも仕方なからう。これを一辺のセンチメンタルと片付けてしまうのは惜しいのである。」というように地域への愛着であり、貢献の意思が新聞発行の出発点であるといえよう。そして新聞という形態をとっていることで、「苟しくも新聞と名のつく以上は、携わる者の常として私もいわねばならぬ言葉がある。まず第一に、新聞とは「公平な世論機関」でなければならぬ、という使い古された言葉であろう。いいかえるなら、右に偏せず左に偏せずということであろう。それがまたすべての根本になるのではなからうか、いたずらに反米、反共ヒステリーになりたくない。」と地域メディアとしての矜持、地域の新聞として地域に対する責任を果たそうという姿勢が示されている。

その新聞のめざす方向としては、同じく「発刊に際して」で、「私のご都合主義によりかかり曖昧な新聞を作ろうとするものではなく、大新聞がその国の利益を代弁し、労組の機関紙が階級的幸せを求めるならば、われわれの新聞がその町の利益を擁護する公器であって一向にさしつかえないはずである。」と単なる愛郷心だけでなく、「町の利益を擁護する」ということを明確に指向し地域民主主義に寄与していこうという姿勢を示している。そして、「いいものは

発掘し、悪いものには遠慮せず批判を加えようではないか。」という是々非々の姿勢を示しているが、地域の利益を守るためそこに存在する「いいもの」を再発見し、「悪いもの」についてはそれを批判し克服していこうとする姿勢は地元学の視点に通じるものがある。

竹田が個人で発行していた『落合新聞』であるが、その内容について、「町のみなさん！原稿をたまには寄せてやろう、資料も提供してやろう、あるいは、広告の一つも載せて助けてやろう、という方がございましたなら、何分共にご支援下さらんことをお願い」するという呼びかけも「発刊に際して」で行っている。後述するが、地域の歴史を編む作業は必然的に地域に根付いた資料を必要とし、地域との共同作業なしには成し得ない。竹田は個人の責任のもと地域との共同作業を図り、ひとつの作品として『落合新聞』を作ろうとしていたのではないかと、という仮説をここに立ててみたい。

昭和38年1月27日発行の第7号1面では、『落合新聞』の目的について「落合とその周辺の沿革、および現勢を伝えることを目的とする。」と一文にて表明されている。竹田の問題意識は、郷土の歴史と防犯、環境、インフラ整備、地方政治などの「町の利益を擁護する」地域の諸問題にあった。昭和39年9月10日発行の第23号2面には、「本紙は落合とその周辺の過去現在を伝えることを目的とする郷土新聞にて、発行予定は五十号。百部を合本保存し後世の資料とする」と「郷土新聞」との表現があり、永続するものではなく50号と期間を区切って終着点を設定し結末を予告している。そして新聞そのものについてはそれを「保存し後世の資料とする」という意図を持っていた。内容について単に地域の現勢を伝えるだけでなく、地元学的視点から後世のために記録を保存しアーカイブとして利用しようとする発想を持っていた。昭和39年1月20日発行の第16号2面に「保存している方が多いので、校正ミスなど多いものを刷直した。内容は殆ど同じ。」という記載も、バックナンバーの保存を意識し、地域のアーカイブたらしめる目的を果たそうとしていたことを裏付けている。

この視点は一時休刊後の昭和40年3月8日発行の第25号1面の「休刊と今後の方針」でより明らかになってくる。竹田の経営する工場の欠員補充に忙殺されたり、発行資金欠乏のために昭和39年10月8日発行の第24号の後およそ半年間『落合新聞』は休刊を余儀なくされたが、復刊の際には、「創刊以来最も関心を寄せられたのは地誌であったからこれを残る二十五号でまとめていきたい。一万部も発行してきたわけは、広く呼びかけ資料を集めるもの狙いで、若干、効果があった明治年代の落合村とその周辺の地図を入手したので、今年は大きく刷り込んでお送りしようと思う。しかし、これらの地図の複製は予算が超過するので有料で希望者のみ配布する予定。古い写真保存の方々からの御通知も受けている。」と今後は地誌に重点をおいていくことを宣言している。この地誌に関しては「将来は地誌を本にまとめることを希望する人もいるが至難だ。各号補筆して一号分原稿二十枚としても五十号で千枚になる。それに地図写真等入ると上下二巻の本になる。少くとも七八十万はかかるだろう。しかし地誌は、まとめなければならぬ義務的なものは感じている。」というように後世の地域に対しての責任を果たし貢献していこうという態度をみせている。

地域のアーカイブたらんという姿勢は、昭和40年5月3日発行の第27号2・3面での「豊多摩郡落合村周辺図(一)新井」の複写転載という勇み足にもつながるが、この件に関して掲載された謝罪文にも「本紙は昭和三十七年五月三日創刊以来、落合とその周辺の過去現在を伝えることを目的として発行された郷土新聞ですが、(中略)当地域に人間が住みついた約一万年前後の昔から今日まで郷土史を編纂する一翼を担わんとして編集しているものでございます。」<sup>9)</sup>と、その目的として「落合とその周辺の過去現在を伝えることを目的として発行された郷土新聞」、「郷土史を編纂する一翼を担わん」としていることに言及している。町への愛着と地域への貢献に端を発し、郷土新聞として町の利益を擁護し、郷土史を編むことで地域のアーカイブたらんとする目的を持っていた。

## 2. 発行部数と間隔

発行部数については、創刊号1面に「創刊号発行部数四千次号六千予定」、第2号2面に「発行部数八千次号一万予定」、第3号2面に「第三号発行部数一万次号同じ」、その後第6号2面に「部数は毎号一万増減の場合はお知らせいたします。」とあり第3号以降は一万部の発行で落ち着いていたようである。昭和39年2月13日発行の第17号2面に「今年は一月から発行部数を八千に減らしたため料金を安くしました」と発行部数が減少している。また、昭和40年3月8日発行の第25号では「今後本誌は四頁の場合部数を極減します」と頁数によって発行部数が増減したようであるが、およそ一万部発行されていた。

新聞の配布については、「二千五百部から千五百部ずつに分けて、落合町を中心に五、六か所の新聞専売所に折込みを依頼する。」<sup>10)</sup>という新聞折込による配布や購読申し込み者への郵送以外に竹田の経営する会社前の掲示板、第14号からは下落合駅改札口付近の掲示板に毎号掲示されていた<sup>11)</sup>。

発行間隔については、当初「思うように取材もできず僅かな隙を利用しての余技であるから、年に三・四回も出せればよいと思っている。」<sup>12)</sup>ということであったが、その後、第7号1面で「六年の計画で五十号までとし年間八回ぐらいの発行とする。」と期間を限定したうえで年8回程度の発行とペースアップし、実際には年末の竹田自身の工場の繁忙期を除けばだいたい一ヶ月に1号のペースで発行が続けられていた。次号の発行までの最短期間は昭和39年1月20日発行の第16号から同年2月13日発行の第17号にかけてと、おとめ山の保全運動が最盛期であった昭和40年4月9日発行の第26号から同年5月3日発行の第27号にかけての24日である。これに対し最長期間は昭和39年10月8日発行の第24号から昭和40年3月8日発行の第25号にかけての151日である。これは「事情は私が経営する小工場に欠員が生じ、代行、補充で明け暮れたからである。糧道を絶たれては新聞は出せなかった。本来なら予定していた半分の二十五号になったら、ひと休みするつもりでいた。それを皆さんに伝えることなく突然休刊したことは残念である。また当初用意した資金百五十万円を使い果たしたことにもよる。それだけの予算があれば五十号は可能なのだが、資料購入や、取材に追われ、私の収入が

減り、消化した。」<sup>13)</sup> という事情による。

『落合新聞』の50号の歴史を振り返ったとき、復刊後は地誌に重点を置くといった宣言や9回にわたり「社説」が掲載され地域の問題に対しての意見表明がなされるなど『落合新聞』の地域に対する関わり方や姿勢がより明確になっている。

### 3. 購読料

購読料については、ローカル新聞として新聞の独立を保つための重大な問題である。しかし『落合新聞』発刊当初、購読料は設定されておらず無料であった。購読料関連の記事は昭和37年10月10日発行の第5号2面の記事が初出である。そこでは「[記事も豊富に内容を充実し購読料を定めてください]という好意あるお便りや、近所の方々や諸先輩からも経費の事情など同様趣旨のことを問われ、また下・二の南原繁先生におあいした時も「料金をとりなさい」とご注意を受けております。無料は失礼になることもあるのでなんとかせねばならぬと思いつつも、よい知恵が浮かばずにおります。金銭の扱いは編集よりも煩雑になり、金は人いちばい欲しいですが私はソロバンをはじくと偏頭痛を起す性癖があります。もう暫く考えさせてください。内容については努力いたします。個人の好みはどうしても出しますが、好みは大切にしたいと思っております。」と購読料の設定には消極的な姿勢であるが、「個人の好みは大切にしたい」という竹田の志向する『落合新聞』の方向性は曲げないという宣言となっている。そこには自らのひとつの「作品」として、人に左右されず発行していきたいという意志が読み取れる。一個の作品としての『落合新聞』を作っていこうとする意志の表明である。

そして、次号である昭和37年12月11日発行の第6号1面では購読料設定の記事が掲載されている。「本号より料金を定めます。一号金十円。払込みはなるべく何号分かまとめて、住所氏名明記し送金またはハガキ電話でお知らせください。集金はついでの時々に寄らせて戴きます。配布方法は煩雑を避けるため従来通り折込ですから支払は自由。六年計画で五十号迄の予定。」同じく第6号2面の後記では「創刊のとき年三、四回の発行と申上げましたが資料が山積みし新聞がそれに追付かぬ状態、増刊するには懐不如意、それで公平に資金を集めてみることにしました。料金はその意味で定めました。折込みですから届いたり届かなかつたりでしょう、ですから支払は自由意志▼参考までに経費を申上げます。一回の発行費三万—三万五千元外注のみ。収入は広告平均二千円位。寄付創刊以来合計千百円。誌代見知らぬ人から五部三十円。以上です。五十号迄発行の予定、予算は百五十万円。部数は毎号一万増減の場合はお知らせいたします。」と購読料を10円とするが、配布の方法は従来通りの新聞折り込みであり「集金はついでの時」であったり、「支払は自由意志」ということで積極的に料金を徴収しようという意思はそこには感じられない。

購読料と新聞の独立の関係について竹田は、「新聞とは、広告を取り、読者を獲得し、経営が成り立ってこそ健全なので、威張れるものだと思う。私のように自費で発行するなんぞは自慢になることではない。むしろ異常であり変則である。キレイゴトになる恐れすらある。あえ

て自費で通したのは、ローカル紙がとかく云われがちなヒモツキにならぬことはもちろん、なによりも煩雑を少しでも避けたいためであった。だから終始便利な折り込みを利用し、はじめは発送もせず、広告も注文があれば載せる程度にした。一人でやるには私はそれ以外に方法はなかったし、苦痛を人と分け合うのも好まなかった。でも、取材から茶の間まで、この親切は守ってきたつもりでいる。<sup>14)</sup>と後述するように異端であるということは承知しつつも積極的に購読料を徴収することはなかった。竹田にとって極力金銭からはなれ煩雑を避けることで新聞の作成に集中していく。ひとつの作品としての『落合新聞』を作りあげていくという姿勢の表れではなからうか。それは新聞という形態をとった、地域を題材とする長編ノンフィクション文学だったのではないか。そうであるとするならば「ヒモツキにならぬ」、「何よりも煩雑を少しでも避けたい」、「一人でやる」、「苦痛を人と分け合うのも好まぬ」というところなどは作品づくりとしての当然の姿勢だといえる。

復刊した25号1面には「個定購読のお知らせ」として「今後本誌は四頁の場合部数を極減しますので、毎号購読を希望される方はお申し込みください。但し、これまでに寄附、寄稿、資料を頂戴した方は申し込みの必要はありません。購読料二百円 定価と送料の加算で払込み切れといたします。」との表示がある。またこの25号以降は非売品とされた31号を除き34号まで購読料は一部20円となっている。その後35号から非売品とされた39号を除き44号までは一部10円にもどっている。終刊間際であるからだろうか45号以降に料金に関する記載はみられない。

第7号1面には新聞発行の経費について「一、経費は誌代と広告費を以て賄なう。一部十円。」とある。広告料については、創刊号2面に「本号掲載の広告は無断掲載につき無料」、第2号2面の後記に「個人の力には限界あり広告は新聞の推進力になるから努めてとり所定の部数までこぎつけたい」との言及がある。広告の規定と料金については、第3号2面の「一段五分の一 千八百円 同四分の一 二千円 二段五分の一 三千五百円 同二分の一 八千円 同全角一万五千円を基準とす。いずれも版下、写植、凸版代を含む。また、紙面僅少と広告の効果を考慮し一段ものは一段、二段ものは二段以上掲載しません。申込はハガキまたは電話か来社。」というものが標準であったようだが、第17号2面に「広告料金一回千二百円 二回二千円 筆耕原版共、お知らせ次第参上。今年は一月から発行部数を八千に減らしたため料金を安くしました」とあるように発行部数によって広告料金も変化した。

また『落合新聞』には現金による寄付も寄せられていた。3、22、23、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33、35、36、38、39、40、41、43、44、46、47、48、50号には「寄付感謝」の項目があり創刊以来の寄付金の総計は221,270円となっている。また、現金以外にも図書など各種資料が竹田のもとに寄せられていたことが各号に掲載の「資料感謝」の項目から知ることが出来る。

このように『落合新聞』発行のための経費は竹田の私財を中心に購読料、広告費と読者・支援者からの寄付によってまかなわれていた。

#### 4. ローカル新聞としての『落合新聞』の機能

ここでは、ローカル新聞として発行された『落合新聞』が地域の中であってどのような機能を果たしたのか考えていきたい。『落合新聞』が50号の間に掲載した記事は、地域の動向や地誌をはじめ、都議会や区議会の地方政治、コラム、小学生の作文など、多岐にわたる。いずれも地域に根ざした内容であり、地域の人々に対してその時々地域の共通な話題を提供していた。

その機能として、「われわれの新聞がその町の利益を擁護する公器であって一向にさしつかえないはずである。」<sup>15)</sup>と発行の目的にも示されていたが、『落合新聞』が落合地域の利益を守ることが発刊当初より意識されていた。地域の利益を守るべく、そのための地域のオピニオンリーダーたろうとした姿勢は、住居表示問題、おとめ山保全、公園設置、地方政治などへの関わり、発言などにも示されている。

このオピニオンリーダーたらんとする『落合新聞』の姿勢に対して地域が評価している投稿記事が掲載されている。そこには、「東京に住む人々は、近隣とのお付き合いも少く、町や区、大きくは都政にも関心の度合いが薄いということが一般的にいえる。一家の主人公が他の区で働く場合の多い東京では地元という観念から遠のくのも止むを得ないが、とくに下落合地区は圧倒的にこういった居住者が多いのでこの傾向が強い町会もあるようだが住民への呼びかけも足りず、関心をもとうと思っても、地元を知るすべもない。こういった真空地帯に現れたのが『落合新聞』で、地元に関心であった私も、これによってこの歴史を知り地元に関するニュースも知見することができた。」「この新聞は郷土史を掘り下げ、「落合秘境」の区民への開放を説くという、極めて公平にして真面目な編集態度であって、一住民としての私は本紙によって啓蒙されるところが大きかった。」<sup>16)</sup>というように地域の動向、政治・文化の情報という地域住民に共通した話題の提供とそれによる地域アイデンティティの醸成に寄与していた。

### Ⅲ. 地域の歴史の記録としての『落合新聞』

#### 1. 地誌—地域のアーカイブとしての『落合新聞』

『落合新聞』を地域のアーカイブたらしめようとした竹田の問題意識の中心であったのが地誌についての記録である。『落合新聞』の地誌に関する記事としては、昭和37年6月10日発行の第2号2面の「翠ヶ丘」で中井御霊神社付近と西落合に残っていた藁葺の家についての紹介に始まる。この記事に関しては、同年8月15日発行の第4号2面の「声」欄で落合第五小学校の教員から「児童の社会科学習のための落合付近の資料が思うように手に入り兼ねている折から、児童の一人が六月十日発行の第二号を特に“翠ヶ丘”の処にしるしをつけて参りまして「先生、ここに落合の昔のことが書いてあるよ」と誇らしげに見せてくれました。そのうれしかったこと。今後共こうした資料を是非公開して頂きたく、御礼と共に御願いを致します。」との投書があった。この記事のすぐあとには「来年の適当な時期から「落合史」—のようなもの—を連載したい考えがありますので、その方法、内容等を来年のごく早い時期に発表し町内



諸賢乞協力の考えです。」との予告がある。一個の作品たろうとした『落合新聞』であるが、地誌をまとめる作業を進めるには地域に根ざした資料の収集など地域の協力が不可欠であった。地域との共同作業が必要となるのである。

竹田のいう「落合史」は次号の昭和37年10月10日発行の第5号1面の「落合の遺跡 ①縄文時代を中心に」からはじまる。その後、通史的に昭和37年12月11日発行の第6号2面で「落合の遺跡 ②弥生時代」、昭和38年1月27日発行の第7号2面で「落合の遺跡 ③土師器の頃」、昭和38年3月8日発行の第8号2面で「中世の落合」、昭和38年4月15日発行の第9号1面で「落合村のはじまり」で古代から中世までを描き、1号あけた昭和38年6月12日発行の第11号1面「江戸の落合①」から14回にわたって近世の落合の歴史が連載されている。この連載では「江戸名所図会」、「東都歳時記」、「十方庵遊歴雑記」、「武蔵豊嶋郡葛ヶ谷村文化三年の図」、「落合物語」、「武蔵の国上落合村古図」、「嘉陵紀行」、「武蔵豊嶋郡下落合村絵図」、「雑司谷八境」、「若葉の梢」、「富士見茶屋」、「櫛楓」などの史料をひいたり、中井御霊神社の雨乞い蓆旗や落合地域各所に残存する庚申塔などを精力的に取材しながら近世の落合について詳述している。

昭和40年7月13日発行の第29号3面からは江戸の落合に引き続き「明治の落合①」にはじまる近代の落合に関する連載がはじまる。この連載の中心は竹田を司会とした明治8年から27年生まれの時90歳から71歳の落合地域の古老10名による座談会である。座談会の様子は、昭和40年10月9日発行の第31号から昭和41年8月5日発行の第39号まで7回にわたって(途中35・36号は掲載なし)見開き2ページで掲載された。

「明治の落合」の連載と重なる時期に「大正・昭和初期の落合」の連載がはじまる。昭和41年5月24日発行の第37号4面には「大正・昭和初期の落合① 文化村分譲地割図を發見 上落合文学堂書庫から」の見出しで「目白第二文化村分譲地割図」が掲載されている。昭和41年9月10日発行の第40号2面には匿名氏の投稿「大正・昭和初期の落合② 落合回想四十年」、昭和41年10月23日発行の第41号2面には「大正・昭和初期の落合③ 落合村年表覚え書」、昭和42年2月2日発行の第43号2面と同年3月1日発行の第44号2面には竹田助雄名で「大正・昭和初期の落合④ 落合町の記憶(上)」、「大正・昭和初期の落合⑤ 落合町の記憶(下)」、昭和42年3月31日発行の第45号2面には中井在住の医師熊倉杏雨による「大正・昭和初期の落合⑥ 会津八一氏の思い出」、昭和42年6月25日発行の第47号4面には「大正・昭和初期の落合⑦ 市郡合併と落合」が掲載され当初の計画では豊多摩郡落合町は中野区に編入することになっていたことが伝えられている。

「敗戦の記録」は昭和42年8月10日発行の第48号の2・3面、同年9月21日発行の第49号の2・3面、同年10月26日発行の最終第50号の2面と3回にわたって掲載された。出席者は司会の竹田と落合地域で昭和20年4月と5月に大空襲を受け、8月15日の敗戦を経験した4人。「歴史の枝葉としても、地域をもっと掘下げて何らかの形をあたえておくことは、何か役立つ時があるのではないか」と座談会を企画し、「地方史的な意味での“私の戦争の記録”」<sup>17)</sup>だ

と竹田はいう。座談会の手法は「明治の落合」、「敗戦の記録」の他に、まちづくりに関して昭和38年9月25日発行の第14号の2面、同年10月24日発行の第15号の2面に掲載された「住みよい町に（上・下）」で取り入れているが、「明治の落合」、「敗戦の記録」については、現在でいうところのオーラルヒストリーの手法を取り入れた地元学的視点から地域の歴史を記録となっている。

この点に関しては、「未熟な点多かったけれど、落合新聞の中で座談会「明治の思い出」（約百三十枚）「敗戦の記録」（約五十枚）この二つは光っているものと自負している。」<sup>18)</sup>と自己評価している。こと、近代に関する記述は、座談会も含めて竹田だけによるものでなく落合地域の歴史を身をもって経験した人たちによる記録となっている。地域の同時代史的な記録としての『落合新聞』であり、地域との共同作業による貴重なアーカイブ資料となっている。こうして『落合新聞』による「落合史」は完結したのである。

これら地誌的内容については、「将来は地誌を本にまとめることを希望する人もいるが至難だ。各号補筆して一号分原稿二十枚としても五十号で千枚になる。それに地図写真等入れると上下二巻の本になる。少くとも七八十万はかかるだろう。しかし地誌は、まとめなければならぬ義務的なものは感じている。」<sup>19)</sup>と竹田は言っていたが、竹田の生前に出版されることはなかった。しかし竹田の業績は地域の人々によって受け継がれていく。これらの地誌は竹田の死後、1998年に『復刻明治の思い出 簡易製本・改訂版—「落合新聞」より』、2000年に『復刻落合の歴史 復刻版—「落合新聞」より』、2001年に『復刻敗戦の記録 復刻版—「落合新聞」より』としてコミュニティ「おちあいあれこれ」によって復刻されている。

また、『落合新聞』は地元の地誌である『落合町誌』についての再評価し、その価値についての記事を掲載している。『落合町誌』は昭和7（1932）年、落合に住んだ近藤健蔵によって刊行された落合の歴史について記した本である。この『落合町誌』について「故・近藤健蔵氏の功績」との見出しで「この本は独立した「落合町」の終熄を永久に記念する意味に於て、また郊外住民の意識から蟬脱して新たな郷土の興隆をねがう意味に於ても、純農村時代から円満な発展を遂げ来たった自治体落合村および町の沿革を詳細に記録している。発行後すでに三十有余年「落合町誌」はますます古典として大切になってきた。」<sup>20)</sup>と落合の古典として、近郊市街地としての形成期に記録された『落合町誌』についての再評価をしている。さらに7回にわたって「落合に触れた本」を紹介<sup>21)</sup>、大正15年発行の「下落合事情明細図」を昭和39年7月に復刻、頒布したり、前述の昭和40年4月に発見された大正13年発行の「目白第二文化村分譲地割図」を紹介する<sup>22)</sup>など『落合新聞』の発掘によって再び世に知られるようになった資料もある。これら資料は現在、落合地域の近郊市街地としての発展を語る上での基礎資料となっており『落合新聞』が落合の地誌研究の進展に与えた影響は極めて大きいものがある。

『落合新聞』は昭和52年と53年に非売品として85部製本されている。現在では新宿区立中央図書館、新宿歴史博物館以外では東京都立中央図書館、中野区立中央図書館で閲覧可能である。

## 2. 住居表示問題—地域の歴史が現代に包含されていく過程の記録

住居表示に関する問題は、地域の歴史を刻んでいる地名が現代の追求める簡便さに包含されていく過程ともいえよう。住居表示問題は地域アイデンティティのもととなる地名の変更を伴う地域の心を変える問題だった。

住居表示は1962年5月10日に「住居表示に関する法律」が施行されるが、その中で落合地域は新宿区内では最も早く昭和40年8月1日に旧西落合一丁目、旧西落合二丁目、旧西落合三丁目、旧下落合二丁目、旧下落合三丁目、旧下落合四丁目、旧下落合五丁目、旧上落合一丁目、旧上落合二丁目を実施された。つづいて昭和41年11月10日に旧上落合一丁目、旧上落合二丁目、旧下落合三丁目を実施された。住居表示が実施される過程においては、地域の中で歴史ある地名が変更されることもあり、大小さまざまな議論が巻き起こった。

『落合新聞』の住居表示に関する記事としては、問題が沸騰していた昭和39年9月10日の第23号1面が初出である。以後旧上落合地区でのこの問題が一段落する昭和41年9月10日の40号まで10回(23、24、25、26、27、28、29、33、34、40号)にわたり掲載された。利便性だけでなく地域住民の愛着や情緒に関わる問題でもあり多くの紙面が割かれている。初出の記事は「住居表示作業の諸問題」の見出しで落合地域の分割について取り上げている。上落合、西落合に対して特に下落合の広さゆえの分割の困難さと新町名の設定案、提案されている町名案が紹介されている。昭和39年10月8日発行の第24号1面では「まちの問題」で下落合四丁目町会長が町境・町名について現状維持を訴え、昭和40年3月8日発行の第25号1面では「住居表示作業の現状 難航する町界 西落合と下四丁目」の見出しで住居表示作業がなかなか進捗しない状況を伝えている。昭和40年4月9日発行の第26号1面では「下落合西部 「中落合」と「中井」か 住居表示」の見出しで区住居表示審議会が西落合と下落合四丁目の境界についてほぼ現状維持のかたちで2月19日に答申したこと、第二次作業として下落合西部が「中落合」と「中井」の新町名に改設される模様であることを伝えている。

また、同号では落合新聞社名で「町名の沿革と試案」を発表している。ここでは落合地域の町名の変遷を紐解きながら新町名として下落合駅前から聖母病院前通りで下落合西部地区を二分し、その東側を「落合」とし西側は「下落合」を継続することを提案している。第二案として西側を「中落合」とし、東側を「下落合」のままとする案を示している。「中井」案については「「中井」独立に対しては賛否両論、適切な境界に欠くため強い反対の声もあり、特に目白学園前から東西に通ずる道路に近在する人々に不満が多い。」とその賛否について取り上げ、「中井独立の功罪」という項目では「中井駅近辺を「中井」にするのは便利でよいと思うし、賛成も多いだろう。けれども不賛成者の多いことも忘れてはならない。中井地域に巻ぞえになる不賛成者の一人が、三丁目の某審議委員へ、「一殺す」という怪電話をかけ、家族を慄えあがらせるという不祥事が起きた。また、変更反対を関係者へわざわざ云いに来る婦人も再三である。これらは町名執着の強靱な現れと見ていいだろう。怪電話の方は目下警察で調査している。現在の作業地域全体が中井にならなかったことは幸いと思うし、小地域を独立させること

は果して賢明であろうか。前例になりはしないか。日頃思うに、中井と下落合とでは互に離反する語感が底流している。中井は、いいかえれば街は賑かさを求める。下落合はそれとは全く別な、静寂を求めて今日に至った。町は双方併立することによって便利し、調和も保持できるけれど、人は根本に、互に閑居を守護しようとする感情を持合わせていることを忘れてはならない。町名は住めば都で長い間には愛着をおび、語感皮膚の一部となって離れ難いものだ。その皮膚の一部も、変ってしまえば、あの時どうしてあんなに騒いだのだらうと思われるくらい慣れてくるのも人間である。けれども、できる事なら町名は替えぬほうがよいと思う。」<sup>23)</sup>と静寂な近郊市街地として発展してきた「下落合」の歴史を尊重した現状維持を希望する論調である。

昭和40年5月3日発行の第27号4面では「中落合中井に決定 下落合西部 寝耳に水だ!!住民は怒りとなげき」の見出しで3月19日の区住居表示審議会の答申と3月31日の新宿区議会本会議での決定と、新町名の賛否を問うアンケートが実施され岡田区長に陳情が行われたことを伝えている。このアンケートの最終結果は次号の昭和40年6月9日発行の第28号3面に「躓いた住居表示 周知不徹底が傷 二一〇二名が反対署名」の見出しで91.2%が新町名に反対であるという記事が掲載された。

その後は昭和40年7月13日発行の第29号1面「提案 住居表示作業 上落合を進めよう 基準に近いが最良」で上落合地域の作業についての丁目の三分割の具体案が2案提案がされている。この上落合地域については昭和40年12月20日発行の第33号1面の「住居表示 上落合三分割は内定 地元審議会で」と環六以東の二分に2つの提案があるものの上落合地域を3つに分けることに意見が一致したことを伝えている。昭和41年2月8日発行の第34号1面では「上落合住居表示 境界で難航」と境界をめぐる審議が続行していることが伝えられ、昭和41年9月10日発行の第40号1面で「住居表示作業 上落合地区決定三丁目に分ける」とその決定が伝えられた。

この住居表示問題は途中、昭和40年10月9日発行の第31号1面の社説「町名変更反対に行過ぎ」で「町名変更反対同盟(仮称)」の配布した「速報第一報」に疑問を示し、町会費不払いを煽動したことを批判している。その中で、「速報第一報の範囲では抗議や警告になるどころか良識ある人々の失望をかう結果になってしまった。アピールは対象をより正確に把握してこそ効力を発揮するものである。かつて、町名変更反対署名運動者の中には、この運動をきっかけにして地方自治の歪みやとかく不評がちな町会の在り方について猛省を促し、直接には住居表示審議会、事務当局への独善や無策を叱咤し、できれば白紙にもどして再審議し、できなければかかる抗議によって今後、残された地域の作業を円滑すすめるための参考にでもなればとひそかに考える人も多かった。それが正確な報道がなされず歪曲されたのでは、折角抗議しようとした目的が踏みにじられてしまうのである。ひとから聞いた話を確かめもせず悪宣伝をしてはならない。」「また「お知らせ」欄の新町名肯定、否定が混淆しているのも変である。この矛盾の原因は前者はこれまでも述べてきたように技術的な面、町会刷新に主力がお

かれている次元と、後者はさらに町名変更には混乱が多いので、住居表示に関する法律そのものに欠陥があるのではないかといひ、従って、法律を一部改正するまで全国的に作業を中止させる運動を行わんとする、この二つの次元を異にする目的に基づくからであろう。後者は中止させることによって生じた十数億円の経費を福祉建設に回したいともいう。一見ヒューマンに聞こえるが、酔っても足をとられてはならない。反対同盟は第二報第三報と続けるという。今後は事情をしっかりと把握した建設的な意見を期待して止まない。」と痛烈に批判している。また、同日の「声」欄には「町名変更反対同盟の諸氏へ」との見出しの「中落合二丁目 一居住者」からの投稿で「新住居表示反対の論拠が明確でないこと」、「下落合町会幹部に対する私的感情が伺えること」の2点を挙げて「町名変更反対同盟」の手法を批判をしている。これに対し次号昭和40年11月12日発行の第32号4面では「竹田氏の不可解な態度について」の見出しで反論が投稿され、これに対して竹田が応じている。

これらの応酬や地域の反対運動は、結果からすれば住居表示作業の遂行に大きな影響を与えることはなかった。行政の推進する政策に対して、地名を守るという地域の歴史を尊重しようとする動きはあまりに無力であった。しかし、落合地域の住居表示問題に関する議論の記録としてまとまったものは他に見られず、『落合新聞』は、この当時の議論の一端を現在に伝えたという点で1960年代の地域の課題を記録し、地域のアーカイブとしての機能を果たしたのである。

(続)

### 【注】

- 1) 林茂樹「地域メディア小史—新しい視座展開に向けて」 田村紀雄編『地域メディアを学ぶ人のために』世界思想社 2003年 p.39
- 2) 田村紀雄・白水繁彦編『現代地域メディア論』日本評論社 2007年 p.10
- 3) 『落合新聞』昭和42年10月26日 第50号4面「終刊に際して」
- 4) 田村紀雄・鈴木裕久「地域紙における「送り手」研究」『東京大学新聞研究所紀要』16 1968年 p.158
- 5) 新宿区都市計画部地区計画課『新宿区景観まちづくりガイドブック』(08落合第二地区) 2010年 p.8
- 6) 泉麻人『青春の東京地図』晶文社 2001年 p.26
- 7) 田村紀雄『日本のローカル新聞』現代ジャーナリズム出版会 1968年 p.298
- 8) 『新聞研究』230号 1970年9月 p.20
- 9) 『落合新聞』昭和40年6月9日 第28号1面「謝罪」
- 10) 竹田助雄『御禁止山』創樹社 1982年 p.248
- 11) 『落合新聞』昭和39年2月13日 第17号1面
- 12) 『同上』昭和37年5月3日 創刊号1面「発刊に際して」
- 13) 『同上』昭和40年3月8日 第25号1面「休刊と今後の方針」
- 14) 『同上』昭和42年10月26日 第50号4面「終刊に際して」
- 15) 『同上』昭和37年5月3日 創刊号1面「発刊に際して」

- 16) 『同上』 昭和40年10月9日 第31号1面「一住民からみた「落合新聞」」
- 17) 『同上』 昭和42年8月10日 第48号2面
- 18) 『同上』 昭和42年10月26日 第50号4面「終刊に際して」
- 19) 『同上』 昭和40年3月8日 第25号1面「休刊と今後の方針」
- 20) 『同上』 昭和37年12月11日 第6号1面
- 21) 『同上』 昭和39年2月13日 第17号1面で滝口宏編 新宿区落合遺跡調査会報告『落合』、昭和39年4月11日 第19号2面で『新編武蔵風土記稿』第一巻、昭和40年4月9日 第26号1面で『江戸名所図会』、昭和40年7月13日 第29号3面『落合町誌』、昭和42年6月25日 第47号4面で小林繁雄『そめの一代』、昭和42年8月10日 第48号4面で『新宿区史』と『新修・新宿区史』を紹介している。
- 22) 『同上』 昭和41年5月24日 第37号4面
- 23) 『同上』 昭和40年4月9日 第26号1面